

しんまい保育士

ベルベル

真紅の魔法マント



地域研修会

ひえー、もう明日に迫った地域研修会を前にベルベルちゃんは何の用意も出来ていません。明日の研修会でベルベルちゃんは音楽の楽しさを園児達に伝える新しい試みを、地域の保育士の先輩方の前で発表しなければなりません。

しかーし何の準備もプランもない状態で明日の発表会を迎える羽目になっていました。

出来ないものは出来ない、やけになってベルベルちゃんはその晩は早く寝てしまいました。

次の日の朝、ベルベルちゃんが目覚めると見慣れないベルベットのマントがベルベルちゃんの布団の上からかけられていました。

お母さんに聞てもお父さんに聞いても知らないと答えますが、きっとどちらかが今日の発表会で使うために用意してくれたんだとベルベルちゃんは思って、今日の発表会で使う事に決めました。

いよいよ本番です、真っ赤なベルベットのマントを着たベルベルちゃんはピアノを弾きだしました、するとピアノからはピアノの音ではなくていろんな動物の鳴き声や車のクラクション、雨の音や雷の音、子供の笑い声や鳥の鳴き声、さまざまな音や声が鳴り響きました。

初めはあっけにとられていた園児や先輩保育士たちも立ち上がって踊りだしたり手拍子したり、ほんとにいつもの童謡を弾いただけなのにどうしてこんな音になるのかベルベルちゃんにもさっぱりわかりませんでした。

いつもと同じ曲でいつもと同じピアノ、違っていたのは、真紅のマントだけ。

ベルベルはこの真紅のマントは魔法のマントなのかもって気づき始めました。

生き物係

ベルベルはしんまい保育士さんなので誰よりも早く幼稚園にやってきます、そんなベルベルにまかされているのは幼稚園で飼っている動物や草花のお世話です。

ある日フフンフーンと鼻歌を歌いながらベルベルが幼稚園に到着して門を開けようとしたら、なんとびっくり門のカギは開いているではないですか、園長先生がタマーに早く来ることがあるのでそうなのかなーと思いながら入っていくといつも吠えてお出迎えのミックス犬のポリポリが静かのまんまです。

あれあれっと思いながらヤギのスーさんの小屋へ言ってびっくり、いつもはすっきりと立っている姿しか見たことが無かったスーさんが横向きで就寝中です、近寄っても起きないので心配になって耳をくすぐってみました。知らん顔です。

ベルベルは動物が死んでいるところを見たことが無かったのであんまりピンとこなかったのですがスーさんはいつもより冷たいいつもより柔らかくないので何となく死んでいるんだなーって思いました。

園長先生にそんなことを電話で伝えて、ベルベルにいい考えがあるので少し遅刻をしますと言っておいて、ベルベルは魔法のマントを取りに家に向かいました。

幼稚園に戻ると園長先生と獣医さんとスーさんとカチカチになった犬のポリポリが保健室でベルベルの帰りを待っていました。

ベルベルはスーさんとポリポリを並んで寝かせるとその上から魔法のマントをかけてやりました。

そして、ベルベルプクプク、プクプクベルベルとそれっぽいいまじないを唱えろといままでカチカチで冷たくなっていたスーさんとポリポリは本当に生き返って元気になりました。

魔法のマントの力を見られたベルベルは動物たちの代わりに園長先生と獣医さんに死んでもらおうかと思いましたが、園児たちの悲しむ顔が浮かんで思いとどまりました。

その代わりにこの不思議なマントと同じものが後2着ありますけれどいかがですかと言って、そっくりな偽物を一つ一千万円で園長先生と獣医さんに買ってもらいました。

めでたしめでたし。

先輩

それは、ベルベルが幼稚園に忘れ物を取りに戻った時の事でした。

あこがれの男子保育士のN先輩とママさん保育士のSさんが何やら真剣な面持ちで話しをしていたのです、園児たちが帰って静まり返った教室の片隅で二人はベルベルの事に気付かずに話を続けていました。

どうやら二人は付き合っていたらしくて、最近ママさん保育士のSさんが本気になってしまって旦那さんと別れるから結婚してほしいって事になっているみたいな話です。

ベルベルは驚いてしまってロッカーのドアをバタンッて音を立てて閉めてしまったのでした。

二人の先輩先生はあわてて隣の教室にいたベルベルのところにかけてきて、あれベルベル先生おられたんですかってあこがれのN先輩が聴いてきたんで、とっさにロッカーから出したばかりの魔法のマントを見せて、私はこのマントを今取りに来たばかりなんですけど、今日は冷えるので先輩にお貸ししましょうかとふざけながら先輩の肩にかけると、急に先輩の顔色が変わって、N先輩は、ママさん保育士のS先生のほうに向かって真剣な表情で語りだしました。

ごめん、僕の気持が初めから遊びだったと思われても仕方ない、今君が家庭を捨てて僕のもとに来られるのは正直重すぎる、今までの事は許してほしい、明日園長には一身上の都合と言う事で辞表を出すよ。

その言葉を聞いたママさん保育士のS先輩は泣きながら教室を飛び出し、そのあとを追ってN先輩も走って行きました、先輩の肩からははらりと魔法のマントが滑り落ちてベルベルはそれをナイスキャッチしながらその場で立ちすくんでいました。

翌日、朝の朝礼で園長先生から、二人の先生が偶然にも今朝付で退職されたので皆さんの負担も暫く増えて大変だと思いますが頑張ってくださいとみんなに報告がありました。

お金とクローバー

園長先生と獣医さんから魔法のマント代としていただいた二千万円を銀行から下ろしてきたベルベルは、やっぱり悪い事して稼いだお金は寄付でもしようかなーって思っていたけれどなかなか踏ん切りがつかないまま二つの大きなレンガを眺めていました。

ふとベルベルはこの事をマントに聞いてみたくて二つのレンガをコートにくるんで眠ってしまいました。

次の朝コートは大きく膨らみ人の形のようになって、その隙間からは大量の四つ葉のクローバーがこぼれていたのです。

目覚めたベルベルはフッと笑いました、たぶんこの四つ葉のクローバーの葉っぱの数は二千枚あるのに違いないと思ったから。

その日幼稚園でベルベルは園長室に呼ばれて園長と獣医に入金したお金がまた帰って来たけれどどうしたものかと相談されましたが、あの魔法のマントは効力が無くなってしまったのでお金はお返ししますと説明して帰って来ました。

曲がってしまった物事をまっすぐに戻す力。

魔法のマントはベルベルと一緒にこれからもその力で幼稚園で起こる様々な事件を解決して行きます。

たぶん、出来るだけ。

多動症

少しやんちゃな子供をすぐに何らかの病気に当てはめてみてしまう事のないようにいつも気をつけてはいるのだけど、今日もあの子は一日中走り回ったり奇声を発したり、もう、本当に困ってしまうんです。

今日も思い余って園長先生に相談しても、こういった症状、仮に多動症であると診断されたとしても特効薬があるわけでもないうえに多方面でのサポートが必要になるために、診断が下された時点でこの園ではお預かりできなくなってしまうのよ。と言われてベルベルは途方に暮れていました。

ある日、だめでもともとだと魔法のマントをその子に掛けてみました。

一瞬その子は大人しくなり、ベルベルは心の中でやったーと叫びましたが、それもつかの間、その子はまたせわしなく教室中を動き回っていました。

がっかりしたベルベルは次の瞬間目を見張りました、その子はチッチッチと舌でリズムを刻みだしたかと思うとダンサーのように一時間以上踊り続け最後にフォーと叫んで席に着き眠ってしまいました。

その一部始終を携帯のビデオで撮っていたベルベルは早速youtubeに投稿するとたちまち世界中から注目され翌日からその子は、この園のいえ世界のトップスターとなっていました。

クリスマスプレゼント

一真君はクリスマスを一週間後に控えたある日突然この園にやってきた男の子ですが、まだ誰とも口をきいてくれません。

家ではちゃんとおしゃべりしているらしいので人見知りしているのかなって思ってたんですけど、今日でもう三日にもなるので一真君のお母さまに何かおうちで心当たりがないか聞いてみたんです。

一真君は三人姉弟の末っ子でとても甘えん坊さん、お父さまは大きな会社の社長さんで最近はお家に帰ってくることもままならないほど忙しくて、一真君と遊ぶこともできなくなっていたそうです。

そのころから前に通っていた超名門私立幼稚園でも誰ともお話が出来なくなっていました、いじめの可能性を心配されたお母さまは思い切ってこの園に転園させてこられたのです。

クリスマスイブの今日、園でのパーティーを欠席した一真君のことが心配でおうちを訪ねてみたんです、一真君はイルミネーションたっぷりのモミの木の下でしょんぼりとしていました。

困った時のマント頼み、少しでも元気になってくれればとベルベルは魔法のマントを一真君にそっとかけてあげました。

お母さまの携帯が木村カエラちゃんの歌でお父さまからの電話を知らせています。

お母さまは話をききながらあわてた様子で、テレビのニュース番組で置いてあるような大きなテレビのスイッチを入れると、そこにはなんとお父さまの会社の事を見知らぬ人たちが記者会見しているところが映っていました。

外国の会社の傘下に吸収合併されることになってお父さまを始め経営陣は全員解雇となるという驚きの内容でした。

電話を切ったお母さまは一真君を抱きしめて大きな声で、やったよ一真、明日からお父さまお仕事行かなくてもいいんだって。すると一真君はとびきりの笑顔でやったーと叫びました。

ベルベルは初めて一真君の声を聞いた嬉しさと、ちょっと荒っぽいけれど、一真君にとって一番のクリスマスプレゼントを贈ってくれた魔法のマントに感謝しつつ、報道の中継車で混雑しかけた一真君の家を後にしました。